

# 漕上 康幸

教授

研究業績

2026年4月1日現在

著書・論文等の区分	著書・論文等の名称、発行所・発表雑誌・学会等の名称、共著の場合の編者・著者名、該当頁数	発行・発表年月
著書（共）	『ロールシャッハ実践ガイド』（「第2章 施行法, 第3章 CPCS（シーピクス）レベル1の過去問題と解説, 第5章 ロールシャッハ・テストによる解釈の実践, 終章」担当）, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会認定資格委員会編, 金剛出版	2023.11
	『司法・犯罪心理学：社会と個人の安全と共生をめざす』（「逸脱の医療化と生物学的モデル」担当）, 門本泉 編, ミネルヴァ書房	2020.11
	『新訂矯正用語事典』（「心理学, 統計」担当）, 鴨下守孝編, 東京法令出版	2019.9
	『犯罪心理学事典』（「素行障害の査定」担当）, 日本犯罪心理学会 編, 丸善出版	2016.9
	『発達障害と司法：非行少年の処遇を中心に』（「第4章 非行と発達障害の関係 実証研究を通じて」担当）, 浜井浩一・村井敏邦 編, 現代人文社	2010.3
	『改訂矯正用語事典』（「心理学, 統計」担当）, 鴨下守孝・松本良枝 編, 東京法令出版	2009.4
論文（単）	『素行症に影響を与える養育態度といじめ被害体験』, 犯罪心理学研究 第61巻(1号), 1頁-14頁	2023.8
	『項目反応理論を用いた反抗挑発症の検討』, 犯罪心理学研究 第60巻(1号), 31頁-43頁	2022.8
	『破壊的行動障害の連鎖と不適切養育経験及び非行抑制傾向の関連』, 犯罪心理学研究 第48巻(1号), 1頁-10頁	2010.8
	『破壊的行動障害のマーチと共感性及び虐待・放任との関連について』, 犯罪心理学研究 第48巻(1号), 21頁-34頁	2010.8
	『共感性と素行障害との関連』, 犯罪心理学研究 第46巻(2号), 15頁-23頁	2008.12
	『非行少年の失敗傾向と破壊性行動障害のマーチとの関連についての検討』, 犯罪心理学研究 第45巻(2号), 47頁-60頁	2007.11
論文（共）	『Influence of maltreatment, bullying, and neurocognitive impairment on recidivism in adolescents with conduct	2022.1

	disorder: A 3-Year prospective study』, Hideki MIURA, Yasuyuki FUCHIGAMI, <i>Applied Neuropsychology: Child</i> 11(1), pp. 25-34	
	『少年鑑別所入所時に文身がある者の特徴について』, 瀧上康幸, 三浦英樹, 矯正医学 第 67 卷(2号), 29 頁-34 頁	2019. 3
	『少年鑑別所における素行障害入所少年の生育環境と認知行動特性 : 非行内容, 性別, 少年審判結果との関係』, 三浦英樹, 瀧上康幸, 矯正医学 第 66 卷(2号), 23 頁-46 頁	2018. 5
	『Impaired executive function in 14- to 16-year-old boys with conduct disorder is related to recidivism: A prospective longitudinal study』, Hideki MIURA, Yasuyuki FUCHIGAMI, <i>Criminal Behaviour and Mental Health</i> 27(2), pp. 136-145	2017. 4
	『少年鑑別所入所時にリストカット痕を有する者の特徴について』, 瀧上康幸, 三浦英樹, 矯正医学 第 64 卷(1号), 9 頁-16 頁	2015. 7
	『Rorschach comprehensive system data for a sample of 240 adult nonpatients from Japan』, Noriko NAKAMURA, Yasuyuki FUCHIGAMI, Ritsuko TSUGAWA, <i>Journal of Personality Assessment</i> 89(1), pp. S97-S102	2007
	『5 因子性格検査 NEO-FFI と包括システムによるロールシャッハ・テスト変数との関連』, 瀧上康幸, 中村紀子, 津川律子, 心理臨床学研究 第 22 卷(5号), 561 頁-565 頁	2004. 12
	『行為障害の実態について』, 近藤日出夫, 大橋秀夫, 瀧上康幸, 矯正医学 第 53 卷(1号), 1 頁-11 頁	2004. 6
	『行為障害と注意欠陥多動性障害 (ADHD), 反抗挑戦性障害 (ODD) との関連』, 近藤日出夫, 大橋秀夫, 瀧上康幸, 矯正医学 第 53 卷(1号), 21 頁-28 頁	2004. 6
	『行為障害の亜型に関する研究』, 近藤日出夫, 大橋秀夫, 瀧上康幸, 矯正医学 第 53 卷(1号), 12 頁-20 頁	2004. 6
	『POMS の抑うつ関連尺度と包括システムによるロールシャッハ・テスト変数との関係』, 津川律子, 瀧上康幸, 中村紀子, 心理臨床学研究 第 21 卷(3号), 307 頁-311 頁	2003. 8
	『POMS (Profile Of Mood States) の混乱尺度 (Confusion Scale) と包括システムによるロールシャッハ・テスト変数の関係—日本人成人健常者データを用いて』, 津川律子, 瀧上康幸, 中村紀子, 佐藤豊, 日本大学心理学研究 第 24 卷, 18 頁-21 頁	2003. 3

	『少年院を出院した少年に関する研究(その2)』, 大川力, 長谷川宜志, 瀧上康幸, 中央研究所紀要 第10巻, 39頁-58頁	2000. 12
	『非行少年の生活意識に関する研究(その2)』, 大川力, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第10巻, 77頁-85頁	2000. 12
	『若年受刑者の特性に関する研究(その2)特に時間的展望について』, 廣橋秀山, 瀧上康幸, 松村猛, 中央研究所紀要 第10巻, 1頁-9頁	2000. 12
	『包括システムによるロールシャッハ・テストの平凡反応』, 津川律子, 瀧上康幸, 中村紀子, 西尾博行, 高橋依子, 高橋雅春, 心理臨床学研究 第18巻(5号), 445頁-453頁	2000. 12
	『Exacerbation of atopic dermatitis and other skin diseases by confinement in a juvenile classification home』, ITO, Yumie KOBAYASIKOBAYASI, Mika KARASAWA, Yasuyuki FUCHIGAMI, Masayo YOSHIMURA, Kimiko NAGAI, Fumitake GEJYO, <i>Acta medica et biologica</i> 48 (3), 103-106,	2000. 9
	『外国人受刑者の受刑態度に関する研究(その2) - 受刑意識を中心に』, 片倉庸介, 廣橋秀山, 長谷川宜志, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第9巻, 1頁-20頁	1999. 12
	『若年受刑者の特性に関する研究(その1) 特に時間的展望について』, 廣橋秀山, 松村猛, 水上好久, 中勢直之, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第9巻, 21頁-46頁	1999. 12
	『少年院における成績評価に関する研究(その2)』, 大川力, 長谷川宜志, 瀧上康幸, 中央研究所紀要 第9巻, 47頁-55頁	1999. 12
	『非行少年の生活意識に関する研究(その1)』, 大川力, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第9巻, 75頁-82頁	1999. 12
	『少年院を出院した少年に関する研究(その1)』, 大川力, 長谷川宜志, 瀧上康幸, 中央研究所紀要 第9巻, 57頁-66頁	1999. 12
	『非行少年の自己意識に関する研究(その2)』, 大川力, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第9巻, 67頁-74頁	1999. 12
	『非行少年の自己意識に関する研究(その1)』, 大川力, 瀧上康幸, 門本泉, 中央研究所紀要 第8巻, 63頁-77頁	1998. 12
	『少年院における成績評価に関する研究(その1)』, 大川力, 妙円蘭章, 瀧上康幸, 中央研究所紀要 第8巻, 45頁-52頁	1998. 12
	『外国人受刑者の受刑態度に関する研究(その1) - 受刑意識を中心に』, 片倉庸介, 長谷川宜志, 瀧上康幸, 中央研究所紀要 第8巻, 11頁-40頁	1998. 12
その他(単)	『心理技官の育成(ロールシャッハ・テスト等の心理検査について)』, 犯罪心理学研究 第51巻(特別号), 204頁-205	2014. 3

	頁	
	『テキストマイニングによる犯罪心理学研究』, 犯罪心理学研究 第48巻(特別号), 184頁-185頁	2011. 3
	『少年鑑別所入所者における発達障害傾向の査定に関する研究(その8) DBD マーチと不適切養育経験及び非行抑制傾向の関連』, 犯罪心理学研究 第47巻(特別号), 134頁-135頁	2010. 3
	『少年鑑別所入所者における発達障害傾向の査定に関する研究(その7) 実行機能 executive function の問題についてのアナログ研究によるアプローチ』, 犯罪心理学研究 第46巻(特別号), 76頁-77頁	2009. 2
	『少年鑑別所入所者と発達障害～停止信号課題 SSRT と風景構成法によるスクリーニングの可能性』, 犯罪心理学研究 第42巻(特別号), 209頁-210頁	2005. 3
その他(共)	『冷淡で無感情な特性及び DBD マーチに関する実証的研究～素行症に影響を与えるマキャベリアニズム得点と反抗挑発症症状数～』、 淵上康幸、明星佳世子、三浦英之、今村有子、浦尾洋旭、岸本武士、犯罪心理学研究 第63巻特別号、104頁-105頁	2026. 1
	『素行症及び反抗挑発症と知能、性格、態度との関連』、 淵上康幸、三浦英之、犯罪心理学研究 第62巻特別号、94頁-95頁	2025. 1
	『少年鑑別所における素行障害少年の心理特性の研究(5年目追跡研究における再入所者の特質)』、 淵上康幸、三浦英樹、山室由利、柿木良太、長田洋和、矯正医学 第70巻(2号)、85頁-85頁	2022. 2
	『少年鑑別所における素行障害少年の心理特性の研究(4年追跡研究における再入所者の特質)』、 三浦英樹、山室由利、淵上康幸、長田洋和、矯正医学 第68巻(3号)、146頁-146頁	2020. 3
	『少年鑑別所における素行障害少年の心理特性の研究(3年追跡研究における再入所者の特質)』、 三浦英樹、山室由利、淵上康幸、長田洋和、矯正医学 第67巻(3号)、146頁-147頁	2019. 3
	『少年鑑別所における男子素行障害少年の共感力等心理特性の研究(2年目報告)』 三浦英樹、山室由利、淵上康幸、長田洋和、矯正医学 第66巻(3号)、144頁-145頁	2018. 3
	『少年鑑別所における男子素行障害少年の共感力等心理特性の研究(1年目報告)』、 三浦英樹、山室由利、淵上康幸、長田洋和、矯正医学 第63巻(3号)、139頁-140頁	2017. 2
	『法務省式ケースアセスメントツール(MJCA)の各属性との	2016. 3

	<p>関連に関する試行的研究Ⅲ～MJCAにおける男子と女子の対比に関する共分散構造分析を用いた試行的分析』, 瀧上康幸, 東山哲也, 二ノ宮勇氣, 那須昭洋, 犯罪心理学研究 第 53 卷, (特別号) 74 頁-75 頁</p>	
	<p>『法務省式ケースアセスメントツール (MJCA) の各属性との関連に関する試行的研究Ⅱ～女子少年に特有の要因等について』, 東山哲也, 瀧上康幸, 二ノ宮勇氣, 那須昭洋, 犯罪心理学研究 第 53 卷(特別号), 72 頁-73 頁</p>	2016. 3
	<p>『法務省式ケースアセスメントツール (MJCA) の各属性との関連に関する試行的研究Ⅰ～知能との関連について』, 二ノ宮勇氣, 瀧上康幸, 東山哲也, 那須昭洋, 犯罪心理学研究 第 53 卷(特別号), 70 頁-71 頁</p>	2016. 3
	<p>『反社会的行動を導く心的過程における非行少年と一般少年の比較』, 吉澤寛之, 瀧上康幸, 犯罪心理学研究 第 53 卷(特別号), 24 頁-25 頁</p>	2016. 3
	<p>『少年鑑別所入所者の自傷に関する実証的研究』, 瀧上康幸, 三浦英樹, 犯罪心理学研究 第 52 卷(特別号), 72 頁-73 頁</p>	2015. 3
	<p>『新しい精神科診断基準 DSM-5 の導入によってもたらされる少年矯正現場の問題点と対策』, 三浦英樹, 瀧上康幸, 矯正医学 第 63 卷(2-4 合併号), 86 頁-86 頁</p>	2015. 2
	<p>『ミニシンポジウム未来は開かれている—若手心理専門職等の育成』, 浦田洋, 瀧上康幸, 外川江美, 坂野剛崇, 犯罪心理学研究 第 51 卷(特別号), 203 頁-203 頁</p>	2014. 3
	<p>『少年鑑別所入所者における煙草火傷痕, 文身及び自傷と性格特性との関連』, 瀧上康幸, 三浦英樹, 藤木ますみ, 栄英俊, 山室由利, 矯正医学 第 62 卷(1-3 合併号), 92 頁-92 頁</p>	2014. 2
	<p>『少年鑑別所入所者における発達障害傾向の査定方法に関する研究 (その 6) ~ADHD 傾向と行為障害傾向との間に行動抑制/接近システムを介在させた因果関係モデルの妥当性~』, 瀧上康幸, 近藤日出夫, 犯罪心理学研究 第 45 卷(特別号), 140 頁-141 頁</p>	2008. 2
	<p>『少年鑑別所入所者の発達障害傾向とその査定方法に関する研究 (その 4) 』, 瀧上康幸, 熊澤勇氣, 伊藤涼平, 塚田裕子, 岩崎陽子, 藤原美智子, 犯罪心理学研究 第 43 卷(特別号), 112 頁-113 頁</p>	2006. 3
	<p>『非行少年の暴力に関する意識について その 2 暴力発現要因の変化:1998 年と 2004 年のデータの比較から』, 佐藤亨, 瀧上康幸, 牧田浩一, 犯罪心理学研究 第 43 卷(特別号), 2 頁-3 頁</p>	2006. 3

	『Relationship between NEO-FFI and variables of the Rorschach Test with the comprehensive system』, Yasuyuki FUCHIGAMI, Ritshko TUGAWA, Noriko NAKAMURA, <i>XVIII international Congress of Rorschach and Projective methods in the university of Barcelona</i>	2005. 7
	『ラウンドテーブル・ディスカッション 非行臨床と発達障害』, 近藤日出夫, 原田譲, 淵上康幸, 小栗正幸, 犯罪心理学研究 第42巻(特別号), 205頁-205頁	2005. 3
	『少年鑑別所入所者における発達障害傾向の査定方法に関する研究(その2)』, 藤原佐智, 淵上康幸, 熊澤勇氣, 前原かすみ, 畑山愛, 犯罪心理学研究 第42巻(特別号), 110頁-111頁	2005. 3
	『少年鑑別所入所者における発達障害傾向の査定方法に関する研究(その1)』, 淵上康幸, 藤原佐智, 熊澤勇氣, 前原かすみ, 畑山愛, 犯罪心理学研究 第42巻(特別号), 108頁-109頁	2005. 3
	『非行少年の暴力に関する意識について』, 佐藤亨, 牧田浩一, 淵上康幸, 犯罪心理学研究 第42巻(特別号), 88頁-89頁	2005. 3
	『非行少年の親の変化過程に関する研究』, 淵上康幸, 近藤日出夫, 犯罪心理学研究 第41巻(特別号), 144頁-145頁	2003. 12
	『ロールシャッハ・テストでみる健常成人の情緒不安定性について』, 淵上康幸, 渡邊悟, 津川律子, 佐藤豊, 中村紀子, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会第9回大会抄録集, 14頁-15頁	2003. 5
	『威嚇的自己呈示と自我同一性の関連』, 淵上康幸, 門本泉, 犯罪心理学研究 第40巻(特別号), 170頁-171頁	2003. 2
	『非行少年の時間的展望と職業観』, 淵上康幸, 大川力, 門本泉, 犯罪心理学研究 第39巻(特別号), 34頁-35頁	2001. 12
	『自尊心維持方略としての非行(その2)』, 淵上康幸, 大川力, 門本泉, 犯罪心理学研究 第38巻(特別号), 136頁-137頁	2000. 11
	『包括システムによるロールシャッハ・テストの領域アプローチ』, 淵上康幸, 渡邊悟, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会第5回大会抄録集, 13頁-14頁	2000. 5
	『自尊心維持方略としての非行』, 淵上康幸, 大川力, 門本泉, 犯罪心理学研究 第37巻(特別号), 164頁-165頁	1999. 11
	『非行少年の自尊感情と社会的スキル(2)』, 淵上康幸, 大	1999. 12

	川力, 門本泉, 犯罪心理学研究 第 36 卷(特別号), 68 頁-69 頁	
	『非行少年の自尊感情と社会的スキル(1)』, 門本泉, 大川力, 淵上康幸, 犯罪心理学研究 36(特別号) 66-67	1998. 12
	『包括システムによる日本ロールシャッハ・テストの日本人成人における反応出現頻度について』, 淵上康幸, 津川律子, 中村紀子, 日本ロールシャッハ学会第 2 回大会	1998. 9
	『ロールシャッハ・テストにおける反応内容の頻度について』, 淵上康幸, 藤岡淳子, 犯罪心理学研究 第 35 卷(特別号), 26 頁-27 頁	1997. 12
	『未来考慮 CFC 尺度を用いた非行少年の行動傾向についての一考察』, 淵上康幸, 出口保行, 犯罪心理学研究 第 33 卷(特別号), 142 頁-143 頁	1996. 1
口頭発表(共)	『ロールシャッハ・テストでみる健常成人の情緒安定性について』, 淵上康幸, 渡邊悟, 津川律子, 佐藤豊, 中村紀子, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会第 9 回大会	2003
	『Japanese Rorschach Normative Data in Relation to POMS.』, Tugawa Rituko, Noriko Nakamura, Yasuyuki Fuchigami, Yutaka Sato, <i>XVIIIth International Congress of Rorschach and Projective Methods</i>	2002
	『包括システムによるロールシャッハ・テストにおける日本人健常成人の平凡反応』, 津川律子, 淵上康幸, 中村紀子, 西尾博行, 高橋依子, 高橋雅春, 日本心理臨床学会第 19 回大会	2000. 9
	『Popular Response among Japanese-Using the Comprehensive System.』, Tugawa Rituko, Masaharu Takahashi, Yoriko Takahashi, Hiroyuki Nishio, Noriko Nakamura, Yasuyuki Fuchigami, <i>XVIIth International Congress of Rorschach and Projective Methods</i>	1999